
キジンガ

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キジンガ

【NZコード】

N1810B

【作者名】

スグル

【あらすじ】

アノザ・アースと呼ばれる世界。そのうちのひとつロクト国で、濡れ衣の罪を拭うため、カジン・ハウジヨは國からの離脱を目指す。だが、亡命を許さぬ國の最高武装防犯組織、ロクト・ミッショネズから逃れられるか。

第一話「リボルバーの叫びと、濡れ衣の少年」

「無実だ！！！本當だ！！！冤罪だ！！！オレじゃない！！！オレじゃない！！！」

鉄臭い牢屋から、叫び声がした。

ドス黒い空氣を醸し出す、この場は少年院。

ここは、罪を犯した未成年達が収容される。

閉鎖されきった空間、罪を犯すまでに陥れられた精神で、気が触れる者が居てもおかしくはない。

だから、このような叫び声は当たり前だ。

叫び声を上げるのは、2日前に収容された17歳のカジン・コウジ三。

収容される前から、自分は無実だと叫び続けている。
そのせいか、声がガラガラだ。

罪状は、強盗。

その事件の内容は、覆面を被つた男一人が銀行にドアを破壊して押し込み、銀行員全員をライフルで脅しの金庫から大金を盗んだ。カジンが、その実行犯としての決め手となつたのは、彼の部屋から強盗の際に使用されたマスクとライフルが見つかる。だが、銀行から強奪した大金は見つかず。

カジンは、最後まで自分の容疑を否認。

しかし、物的証拠から、彼は少年院に送られた。

そんな彼の居る鉄格子に、肥満の看守一人が近づく。

叫び続ける彼に対し、容赦なく警棒で彼の体を氣絶するまで殴りつけ黙らせる。

そのせいか、彼の体はアザだらけだ。

毎日、気を失つては目を覚まし、また叫び声を上げる。

周囲からは、気触れたとしか思われなかつた。

彼は氣絶すると、事件当日の夢を見る。あの事件の当日・・・。友人である同い年のテキ・ツウから頬まれ、カバン2つ預かつた。カバンは絶対に開けないでくれと言われ、人のいいカジンはカバンを開けないまま、部屋に置いた。

そして、カバンを預かつた翌日。

いきなり警察が部屋を捜査しに来て、カバンを押収されたときに、初めてカバンの中身を知つた。

テキが、銀行を襲つた。

カジンは、テキの罪を着せられた。

彼の部屋を、警察に捜査させたのもテキだ。

しかも、テキは銀行から奪つた大金を持ち去り失踪。

カジンは、自分の潔白を晴らすために真実を話すものの、警察からは口から出任せの嘘として相手にされず。

テキのことすら調べようともしない。

彼は自分の家族、友人、知人から、白い目で見られ地獄を見た。誰も信じてくれなかつた。

その事実に苦しんだ。

そして、現在に至る。

寝言でも、オレじゃない・・・、オレじゃない・・・と唸るしか、カジン・コウジョには出来なかつた。

翌日になり、氣絶した彼は目を覚ます。

目を覚ましたと同時に。

「無実だ！！オレじゃない！！オレじゃない！！オレじゃないん

だよ！……

また、叫び声を上げ始める。

何度も、看守にぶたれても、彼は止めなかつた。
こうしないと、自分の気が狂うと思つたからだ。
そして、いつものように看守が現れる。

「オレじゃない！！！オレじゃないんだよ！……」

まだ、カジンは叫ぶ。

だが、彼の鉄格子に近づいてくる看守は、いつも容赦なく殴りつけてくる肥満の看守ではない。

長身の制服からでも解るほどの筋肉質の男だった。
帽子を深く被つていて、顔がよく見えない。

その看守が、静かに、叫び続けるカジンの鉄格子に近づいた。
「オレじゃない！！！オレじゃないんだよ！……」

カジンは、新顔の看守に向かつて叫び散らす。
警棒で、看守に一発殴られると覚悟をした。

その時、看守が口を開く。

「今から・・・脱獄だ・・・」

一瞬、耳を疑う。

その言葉に、カジンは叫び声を止めた。
彼が、呆気に取られていた瞬間。

「おい！！侵入者が居たぞ！！！」

いつもの肥満の看守の声がした。
すると、多くの看守が姿を現す。

カジンの近く居るのは、看守ではない。
肥満の看守が、侵入者と叫んだ。

察するに、カジンの近くに居るのは・・・。

その長身の男が、制服からリボルバーを取り出す。

慣れた手つきで、先頭にいる看守達の足に照準を定め撃つ。

リボルバーの生の銃声は、想像以上に大きい。

看守達は狭い通路を、集団で動くのだ。

先頭の者の足をくじくだけで、十分に後方の者の足止めになる。

その隙に、男はカジンの鉄格子の鍵穴も撃ち壊す。

鉄格子が開いた。

状況の飲み込めないカジンは、身動きが取れない。

そんな彼に対し、長身の男が、

「早く出ろ！！」

リボルバーに弾を込める男の示唆を受け、カジンは鉄格子から出た。向こうからの看守達も、同じく銃を撃ち始める。その流れ弾を避けるように。

カジンは、謎の男と一緒に逃げた。

無我夢中で。

少年院には、警報機が鳴り響く。

その警報機を尻目に、男が侵入してきた地下通路を入つた。異臭の漂う地下通路を、男と一緒にカジンは走り抜ける。

地下通路を出ると、外は朝を迎えたばかりの市街地だ。

市街地なら、隠れる場所はどこにでもある。

だから、市街の適当な廃墟ビルに走りこみ、ひび割れが目立つ瓦礫に隠れた。

気づけば、もう追つてくる者は誰も居ない。

二人は、脱獄に成功した。

「はあはあ・・

無我夢中で走つたせいで、カジンは吐き気に襲われる。

吐き気を抑えようと口に手を当てた。

「ふはー」

男はリボルバーの弾薬を手入れしながら、タバコを吸う。

汗一つすら、流れていない。

しかも、看守達からの銃弾の嵐をまつたく被弾していない。

「大丈夫か。確かに新聞に載つてたな、カジン・コウジョ君」

男が、吐き気に耐えるカジンに声を掛ける。

その声に、カジンは口から手を離した。

とりあえず、カジンは、彼にまず何を言えばいいか解らない。

彼は、あの事件のことと、自分のことを知っているようだ。

感謝の気持ちはあつても、とりあえず、頭には疑問が走っている。

「あんた・・・誰ですか・・・」

吐き気をこらえつつ、カジンは男に顔を向けて言う。

男は、制服を脱ぐ。

すると、タンクトップを着た強靭な筋肉が見えた。そして、男はリボルバーをズボンのポケットに入れて答える。

「マサイ・・・ナカヒロ・マサイだ・・・」

パトカーのサイレンが鳴る。

間違いなく自分達を探している。

サイレン音を耳に入れながら、マサイという男が立ち上がりて口を開いた。

「なんとかして、この国から出るぞ・・・」

その言葉に、カジンは吐き氣を忘れた。

「亡命・・・」

そう、カジンは言つ。

この男は正気なのかと思っている。

もう、カジンには驚くしか出来ない。

一体、これから、なにが・・・。

不安しか、カジンにはない。

四季がはつきりした温暖な17・075・200平方メートル。人口、142・893・540人。国の法律を守る警察に、一つだけ特殊な組織がある。

その名も、ロクト・ミッショネズ。

ロクト警察の中心核。

この組織が、解決できなかつた事件はない。

とある集団武装集団が起こした暴動をねじ伏せ、裏社会の暴力組織を撲滅までに追いやつた。

それほどまでの脅威の戦闘力を持つた組織。

そんなロクト・ミッショネズが、カジンの脱獄を許すわけがない。更には、ロクトを脱獄させたマサイも許すわけがない。

このロクト国から、カジン、マサイは逃げ出す。

それだけが、この物語の主な内容だ。

しかし、ロクトからの亡命行為は、誰も達成されていない。

第一話「金色のネームプレート」

例の少年院から、かなり遠く離れたロクト国(のちよつじ)の中心部にある首都キッカス。

その首都には、多くのビルが立ち並ぶ。

まさに、コンクリートに埋もれ、緑が見えない。

その首都キッカスに、とてもなく高いビルがあった。

高さ、508 mのビル。

そこが、ロクト・ミッショネズ本部だ。

本部には、脱獄の情報が流れ始めている。

コンピュータに向かい合う情報員数百名が、情報処理室を埋め尽くす。

情報員の一人が、少年院から送られた情報をコンピュータから読み取っている。

「カジン・コウジヨ、17歳。罪状、強盗。30分ほど前に、少年院から謎の侵入者と共に脱獄。現在、少年院から数キロ離れたガズ市街に居ると思われる」

業務的に、情報員の男が読み上げた。

その音声は、本部のアンテナから電波を通して、各地に散らばるロクト・ミッショネズのメンバー無線機に流れる。

そして、情報員がもう一言葉を言つ。

「なお、カジン・コウジヨの脱獄を援護した男は、看取の一人から制服を奪い、少年院に保管されていた試作のインテグラルウィルスを強奪して行つた模様」

そう言い終わると、無線は切れた。

これによつて、ロクト・ミッショネズは、カジンの捕獲行動を開始

し始める。

地下通路を出ると、外は朝を迎えたばかりのガズ市街地。市街地なら、隠れる場所はどこにでもある。

市街の適当な廃墟ビルに走りこみ、ひび割れが目立つ瓦礫に隠れた。そして、マサイとかいう男から、訳も解らなく助けられ、亡命すると言われた。

「まず、あんたは僕の質問に答えてもらいたい・・・

疑問だらけのカジンは、マサイに問う。

「どうぞ」

マサイは、タバコを一本吸い終つたらしくひび割れた地面に押し付ける。

「まず、なんで、僕を救つた・・・

「あの少年院の中では、一番つるさかつたから」

あつたり、マサイは答える。

「それだけなの・・・

「うん、それだけ」

理由はシンプル。

だから、カジンの頭は、またショートする。

「じゃあ、なぜ、看取のコスプレして少年院に侵入した

また質問を投げつける。

マサイは懐から、またタバコを取り出す。

口に加えながら、マサイは喋る。

「俺が看取のコスプレして侵入したのは、あそこで、面白い物があると聞いて盗みに行つた・・・

そう言って、男はポケットに手を入れる。

ポケットから取り出したのは、タバコに火を点けるためのライターと一緒に注射器二つ。

中には、液体状の薬品。

マサイは、タバコに火を点けおわるとライターをポケットにしまう。注射器に目が行つたカジンは・・・。

「麻薬してるのでか・・・」

真つ先に、その言葉を選ぶ。

「違う、ウィルスだ・・・。ロクト・ミッシュネズ開発のウィルス・・・

と、マサイは言いながら、自分の注射器をポケットに戻す。ウィルスと言う言葉に反応した。

「悪性の病原体ですか・・・」

真つ先に出るウィルスのイメージが、カジンの頭に浮かぶ。

「知らん・・・。だが、奴らが無敵の警察部隊と呼ばれる理由が、このウイルス薬品らしい」

マサイは、カジンの顔に目を向け注射器を出す。

「貴様、打つ氣あるか?」

そう言って、カジンに注射器を差し出す。

いきなり、そんな物を人に勧めるのか。

カジンは、首を横に振る。

そんな不得体の知れない薬品を、体に打ち込む気持ちはない。ビルの外のサイレン音が大きくなつてきたのに、一人は気付く。どうやら、この一帯に警察の手が伸びたようだ。

首を横に振ったカジンに、

「友達に、タバコ勧められてもやらないタイプか?お前さんは「からかうように、マサイは言つ。

そして、立ち上がる。

サイレンが大きくなつてきたのだ、一人には、この場から離れるしかない。

マサイは、カジンに顔を向ける。

「これから、俺は逃げるが、ついてくるか?」

選択を迫らせるように、マサイは言つ。

だが、その問いをするまでもなく、カジンの決断は決まっている。濡れ衣を着たまま、牢屋で叫ぶくらいなら逃げると。

「逃げますよ」

そう言い返したカジンの言葉に、マサイは笑う。

笑いながら、ポケットにまた手を入れる。

そして、マサイは素早く手を出すと、なにも言わずに、注射器をカジンに投げ渡す。

「えつ！」

注射器を、カジンはなんとか受け取った。

「貴様を助けたのは、うるさかったからだ。あと、一番、あの少年院に似合わないと思ったからだ。その注射器のウイルスは、これから、俺たちの敵になるロクト・ミッショネズの秘薬だ。持つてて、損はない」

と、マサイは言つ。

この注射器が、ロクト・ミッショネズの切り札といふことである。カジンは、この得体の知れない薬の効果を知らない。だが、彼は信用できると思つた。

「走るぞ！」

マサイは、大声で叫ぶ。

声に合わせ、二人は走りだす。

こうして、一人の「命行為」が始まった。

彼らが走りだした廃墟の多い寂れた市街に、一人ロングコートの男が歩く。

虚しい廃墟を歩くその姿は、どこか上品な感じさえ漂う。

そのロングコートの胸元には、金色の横長のネームプレートが輝く。

金色に刻み付けられた文字は・・・

「ロクト・ミッショネズ・メンバーズ

カコイ・トリ」

と表記されている。

この男の名のようだ。

氣のせいが、彼が現れてから、脱獄したカジンを追うパトカーのサイレンが止んだ。

しかし、それは脱獄を警察が許したわけではない。

この金色のネームプレートの男が現れたから、パトカーの出番がなくなつたからだ。

それほどまでに、この男は信用されている。

と同時に、それほどまでに、ロクト・ミッショネズから逃げられなといということだ。

廃墟の市街の影になりやすい場所を、カジン、マサイは走る。

「おい、サイレンが止んだな・・・」

マサイは、そう言つ。

ロクト・ミッショネズが現れた。

彼の野性の感覚が、そう思わせた。

第三話「翼生える」

彼らが走りだした廃墟の多い寂れた市街に、一人口ングコートの男がいる。

その男には、金色のネームプレートがある。

ネームプレートには・・・

「ロクト・ミッショネズ・メンバーズ カコイ・トリ」と刻み付けられている。

これは、彼がロクト・ミッショネズのメンバーであるといつ証。証を胸に掲げ、彼は一枚の資料を取り出す。

それには、カジンの顔写真が載っている。

男の細い目が、資料を凝視する。

そして、この男の切れ長の細い唇が開く。

「カジン・コウジョ・・・、17歳。罪状、強盗。30分ほど前に、少年院から謎の侵入者と共に脱獄。現在、少年院から数キロ離れたガズ市街に居ると思われる・・」

この情報は、さつき流れた本部からの連絡だ。

男は、それを確認した。

「もう一人、脱獄の援助と新作のインテグラル・ウィルスを奪った男が居るか・・」

カコイという男は、資料を破り捨てた。

もう必要ないからだ。

カコイという男から、数メートルの廃墟の瓦礫たち。

そこに、カジン、マサイは居る。

ちょうど、瓦礫は一人の体を隠せる大きさだ。
カジンは、その瓦礫の壁から顔を覗かせる。
すると、カコイの存在に気づく。

「マサイさん、変に派手な男が居る・・・」

カジンの声は、向こうに気づかれまいように小心翼い。
他の方向に、首を向けていたマサイは振り向く。
そして、カジンが示唆した場所に顔を向けた。
本当に、派手な姿だった。

このことに対する、マサイは・・・

「ボリが消えて、あいつが現れた・・・何故だと思う・・・」

そう、カジンに問う。

マサイの片手の握られるリボルバーのシリンドラーが動く。
「解りませんよ・・・」

素直に、カジンは答えた。

マサイにとつては、腹が立つまでに率直な回答だった。

「ボリは、あいつに俺らの捕獲を任せたってことだよ、このバカ」
そう怒りながら、マサイは瓦礫から体を出す。

「なにする気ですか・・・」

カジンは、そのマサイの動きに驚く。

マサイが、丸腰とも思える男の不意を突いて銃を撃とつとしている。
振り返つて見た彼の目が本気だ。

卑怯だと、カジンは叫ぶ間もなく・・・。

バン！！

サイレンサーのない生の銃声は、カジンの耳を貫く。
男を撃つたりボルバーは、硝煙が漂う。

引き金を引いたマサイの目には、罪悪感も何もない。

「あんた！！なにやつてるんだよ！..」

カジンは強く責める。

丸腰の男を撃つたのだ、このマサイは。
彼に強く軽蔑するまなざしを送る。

弾は、カコイに命中した。

そのつもりで、マサイは額から汗をたらす。
だが、彼は銃を收めはしない。

むしろ、マサイは額から汗をたらす。
その様子に、カジンは気づいた。

銃を降ろさないマサイが、口を開く。

「おい・・、ロクト・ミッショネズってのは銃じや駄目らしい・・

その言葉で、カジンは軽蔑していたマサイから目を離した。
視線は、カコイに向ける。

すると・・。

カジンは、自分の目を疑つた。

さつきのマサイの不意打ちを卑怯とは思えなくなつた。
撃たれて倒れたはずのカコイが、カジンらの方に顔を向けている。

その細長い目が、カジン、マサイを映す。

「そこに居たか・・」

切れ長の唇が、そう言葉を言ひ。

銃の弾から、位置がばれた。

さらには、そのカコイの背中から羽が生えていた。

長く派手なコートを破り、鳥のよくな、いや、鳥そのものの巨大な
羽がカコイの体を覆つていて。

だから、マサイの銃弾が翼にヒットし、カコイの致命傷にはならなかつた。

数メートル先にいる二人には、そのことが解る。

「嘘だろ？！？」

カジンは、男の背中から翼が生えたことに驚く。
マサイもだ。

冷や汗が、流れた。

だが、事実は事実で、カコイには鳥と同じ翼がある。

しかも、それどころか、カコイの顔までもが変化し始めた。

あの切れ長の唇が、鳥のくちばしのように尖る。

顔全体が、鳥のように変化し始めた。

その変化に、二人は驚愕するしかない。

同時に、ロクト・ミッショネズの本当の脅威を知った。

このように、人間ではなくなるのが、奴らの恐ろしさなのだと。

インテグラル・ウィルス。

その言葉を、マサイは思い出す。

確か、誰から、そのウィルスの噂を聞いた。

人間の遺伝子に食い込む特性を持ち、そこから、遺伝子から細胞、細胞から筋肉、骨格、神経まで変化させる細菌。

このウイルスに手をつけたロクト・ミッショネズは研究を進めた末、ロクト・ミッショネズ自体が最強になった。

彼らは、ウイルスをコントロールしたのだ。

噂を信じ、マサイは事情から少年院に入り奪つた。

この事柄を思い出しながら、マサイは、カコイ・トリの変化を見つめる。

男の肉体が、コートを破るまでに強靭な筋肉に発達する。

顔までも鷲に変化。

さらには、手足には強靭な爪が生え、背中には翼が・・・

人間の姿をそのままに、男の体は鳥になつた。

鳥人間という表現が似合つ。

ロクト・ミッショネズが、インテグラルウィルスで、人体を人間で

はなくさせた。

それを、なにも語らずにカコイは証明する。

破れたコートから、鳥人間と化したカコイの肉体が覗く。

鳥目が、カジンとマサイを睨む。

逃げるぞ!!

そう叫ぶ必要もなく一人は駆け出す。

カジンは、困惑したまま走る。

人間が鳥になつたのだ、驚くしかない。

そのカジンの横で、マサイは微笑んでいる。

何故なら、やつと、このポケットに入っている注射器の内容がわかつたからだ。

「このウイルス打てば、ああなれるのね・・」

カコイの変化は絶望ではなく、希望であると、マサイは笑う。

第四話「ドッグファイト」

カジンとマサイは、謎のウイルスによって鳥人間と化したカコイから逃げ回る。

しかし、マサイにはウイルスの作用が解り、口元に笑みを浮かべる。カジンの頭には、理解は出来ないが、とにかく翼が生えたカコイから、どうやって逃げるかしかない。

カコイは鳥人となつた姿で、翼を広げる。

広がつた翼が、大きく上下に動く。

すると、風が流れ周囲の砂埃が舞始め、カコイの足は地面から數メートル離れ、体は宙に漂う。

再び、翼がばたくと、カコイの体は空中に浮いたまま一方の方向に移動。

カコイは、空を飛び始めた。

翼がばばたけば、ばばたく程、カコイの体は早く飛んだ。

まるで、ロケットのように。

そして、向かう方向はカジン、マサイの位置だ。

カコイの顔は、まさに鳥と化した。

なのに、その固そうなクチバシが唇のように柔らかく笑みを浮かべる。

「生身の人間の足で、どこまで逃げられるかね……」

余裕を持つた口調で、カコイがそう言つ。

「マサイさん！」

廃墟が続くガズ市街を走りながら、カジンはマサイに話し掛ける。カジンが焦っているのは、あの翼で、カコイが飛んでくると思つているからだ。

実際、その通り故に、彼らは走つて逃げるしかない。

「マサイさん…どうするんですか！！！」

カジンが叫んでも、返事は返つては来ない。

何故なら、マサイの口には例のウイルス入りの注射器がくわえられているからだ。

カジンの問い掛けを無視しながら、マサイは自分の太く逞しい左腕に自分のコードを巻き付け縛ると、左腕の血液の流れが圧迫され、血管が皮膚から浮き出ってきた。

そのまま、マサイは口から注射器を右手に持つた。

どうやら、注射を打つ気だ。

そのことに、カジンは気づく。

「打つ氣なんですか！！！」

「じゃねえと、あんにやろうの始末つけられねえだろが！！！」

やつと、カジンの叫びに対する回答をした。

マサイは走りながら、注射器を左腕に当てよつとする。

注射針が浮き上がった血管を刺そうとしていたが、当然、走つているため上半身が震えて、針が正確に血管を狙えない。

「くつ…」

ウイルスの効用が解つたと叫つのに、これでは打てない。

だから、マサイは急に走つて足を止めた。

カジンも同じく足が止まる。

「あなた、そんなの打つ氣ですか！！！」

そうカジンが叫んでも、もう遅く、マサイは血管に注射針を刺す。

注射器のピストンを右手の親指で押し、中の液体がマサイの血管内に入つて行く。

ぱさりー・ぱさりー！

不自然なまでに、大きな羽音がした。

耳に入つてきた羽音に、カジンはビクつく。

この音は、鳥の羽の音ではない。

風が砂埃と共に、瓦礫の破片を吹き荒れている。

羽音が響く方に、カジンは顔を向けた。

「見つけた…」

男にしては、高い声がくちばしから聞こえた。

カジンの目に入ったのは、長く派手なコートを破つた鳥そのものの巨大な翼。

その翼を生やしている鷲顔の人間。

人間の遺伝子に食い込む特性を持ち、遺伝子から細胞、細胞から筋肉、骨格、神経まで変化させるインテグラルウイルス。そのウイルスから、異形の姿になつたカコイ・トリが、カジン、マサイの数メートル先に居る。

カジンは震えた。

人間ではない異形の鳥人が数メートル先に居るのだから。

「万事休す…」

そう口からこぼした。
このあと、どうなるんだ…。

カジンは、昔から嫌なことが真つ先に浮かぶ少年だった。なにをするにも、失敗のイメージが真つ先に頭に浮かぶ。だから、カジンはなにもしないで生きてきた。

すべて他人や親の指示に従う。

だから、少年院に落とされた。

無罪で入った少年院は、もはや希望もない。

だから、身も知らぬマサイが来るまで、暴れて気を紛らわせてた。

暴れないと、負の念で自分がどうなるかわかつたもんじゃない。

そして、脱獄したが、現在この有様だ。

カジンは生まれつきと言つていいほど、希望という言葉の意味を知らない。

本当に、希望なんてなかつたからだ。

カコイという男が翼を羽ばたかせ、接近していく。

その接近速度は、ゆっくりだ。

だが、それは奴の余裕からの速度。

そうやって、恐怖をあおろうとしているのだ。

徐々に、徐々に、鳥人間が近づく。

そのことに、カジンは怖じけた。

だから、足が動かない。

「あああああああ！！！！！！！」

ついには、叫んだ。

断末魔のつもりで叫んだ。

それほど、異形なカコイに恐怖していた。

もう少しで、カコイの体が来る。

カジンは身構えた。

その時……。

バゴッ！！

カジンの顔に、太い拳が当たつた。

「！？」

拳が、カジンの左の頬を打ち抜く。

殴られた勢いで、体ごと廃墟の並ぶ路地に吹っ飛ぶ。背中から、地面にぶつかった。

殴ったのは、誰でもなくマサイ。

カコイが接近している時に、マサイはカジンを殴った。

赤くなつた頬を、カジンは手で押さえた。

そして、訳も解らずに、自分を殴ったマサイに口に向ける。すると、マサイの口が開く。

「騒ぐな！ それでも、男か！ ！」

そう大きく叫んだ。

彼の腕に血管が走っている。

同時に、彼の体にも血管が浮き上がつていて、「なつ……」

すると、カジンはある異変に気がついた。

マサイのタンクトップから覗く、筋肉から獣のような体毛が生えた。そして、彼の両手から強靭な爪が伸び、唇の両端が裂け始める。

まるで、獣のように。

その人間ではなく、獣のように変化するマサイを、カジンは両方の目で見つめる。

「まさか……、マサイさんも……」

カジンは、マサイがウイルスを打ったのを思い出す。だから、この変化には納得した。

カコイが近づいてはいるが、カジンは怯えなくなつた。

何故なら、田の前に居るマサイに生まれて初めて希望を感じたからだ。

カジンは瞬きをした。

その瞬きが終わって、田を開いた瞬間。

「あつ……」

そのよつな驚きの声を出す。

カジンの目の前には、人間ではなくなつたマサイの姿がある。下半身には、はちきれんばかりの強靭な筋肉を抑えるGパン。上半身には、強靭な筋肉と、強靭な獣のような爪が5本の指に。そして、顔はまさしく狼のように横の切れ長の牙を生やした口。マサイは、あのウイルスで狼人間になつた。

۱۰۷

カジンは、驚くしかなかつた。
生まれて始めて感じた希望に。

第五話「孤立」

マサイの姿は、もはや狼のようだ。

下半身は、はちきれんばかりの強靭な筋肉を抑えるGパン。はたきの様な尻尾までついている。

上半身に至つては、強靭な筋肉と、強靭な獣のような爪が5本の指に。

顔はまさしく狼のように横の切れ長の牙を生やした口。

カコイが鳥人間なら、マサイは狼男という状態。

「おいおい…、すげえ爪だな…」

と、変化した自分の両手を眺めてマサイは言つ。

自分でも驚いているようだ。

だが、そうしている間にもカコイは迫る。

カジンはマサイの変化に驚きもしたが、やはり、迫つてくるカコイに神経を使う。

「マサイさん、鳥男が…！」

迫るカコイを、マサイに気づかせた。

気づけば、もう皿と鼻先という比喩が合つぽじ近づいている。

「けつ…、驚いてもらんねえか…」

発達した両足の筋肉を抑えるGパンの後ろポケットにて、引っ掛けでいたリボルバーを右手で取り出した。

そして、カチャリと銃をカコイに向けて構える。

いつでも、撃てる様にマサイの眼光は鋭くなつた。

当然、数メートル先のカコイにもマサイの変化は見えた。

彼は翼を羽ばたかせ、接近しながら口の中でつぶやく。

「カジン・コウジョを逃がした男は、インテグラル・ウィルスを打

つたか！…

だが、その声は自分の翼の音でかき消された。
体を飛び込むように垂直にさせて飛ぶカコイは、マサイまで、あと
数メートルの距離で体制を変えた。

両足を思いつきり、廃墟の地面に押し付ける。

大きくほこりを飛ばして、矢飛びに飛んでいた自分の体にブレーキ
をかけた。

ザザザザザ…！！！と地面が鳴り、カコイは両足で地面に立つ。
「なんだ…！」

急に停止したカコイを、カジンは廃墟のビルの壁に背をつけ懶しく
感じた。

マサイの方は、3メートルくらいの田の前に居るカコイに対しても、
未だに銃を向ける。
いつでも撃てるよつ。

「…」

狼男になつても、マサイは無口だ。

その静けさが、3メートル先のカコイにプレッシャーをかける。
「はん…」

銃を向けられたカコイも、冷静だ。
撃つてみろ！

と言わんばかりの「王立ちをカコイはする。

その様子を凝視するマサイの狼顔の切れ長の口から、ちぢらちぢら牙が
覗く。

カコイの鳥類のくちばしが開く。

「我が組織のウィルスを盗んだ上に、自分の身体に投下する行為は、
我々に対する侮辱だと言うのは解つてゐな…！」

「へつ…、これ作る際に、受刑者での人体実験行つたくせによ…」

その言葉に、カコイの体が少しビクついた。

カジンの目からでも解るくらいだ。

リボルバーを握るマサイの右腕は垂直だ。

カコイのくちばしが、また開く。

「貴様と、カジン・コウジヨは重罪だ…。我が国の誇りであるロクト・ミツショネズに対するこの行為は…」

バン！！

リボルバーの銃声が鳴った。

マサイの右手からは硝煙が漂う。

リボルバーの引き金を引いたのだ。

「ひつ…！」

喋っていたカコイの顔の左頬から、血が流れる。

これは、さつきの銃弾により生まれた傷だ。

思わずカコイは、左頬を手で押さえる。

硝煙臭いマサイは、口を開く。

「大人しく焼き鳥になれ…」

狼顔で表情が解りにくいが、マサイの目がどす黒く濁つた。

カジンには、マサイの考えていることが解る。

あれは、殺意だと…。

「貴様！！！」

発砲に激したカコイは翼を広げる。

広がった翼が、大きく上下に動き周囲の砂埃が舞始め、カコイの足は地面から数メートル離れ、空を飛び始めた。

だが、それにもマサイは怯えはしない。
もうカコイと同等になつたのだから。

銃を、また静かに構える。

照準の先に映るカコイは、自分の強靭な爪をむき出す。
その爪で、マサイを切り裂くつもりだ。

バッ！！

カコイが体を垂直にし、翼を羽ばたかせ、マサイに向かつて突進を始めた。

銃を向けられていようが、逆上しているせいか構っていない。

解りやすいほど、カコイの突進の軌道は安易。

当然、矢飛びに自分に向かつてくるカコイを狙うのは、マサイにとっては簡単だ。

しかも、インテグラルウイルスのせいか、さっきまで速く見えていたカコイの飛翔が遅く見える。

そのおかげで、より狙いが精密になった。

だから、ゆっくりと確実に銃の照準を合わせる。

照準は、カコイの鳥顔の額。

そこ撃つ。

マサイは、ためらわない。

本気で、撃つつもりで居る。

当然、カコイの命は配慮はしていない。

「一撃で、楽に…」

ボソッと、マサイは呟づ。

同時に、引き金に掛かる人差し指が動じた。

その声にカジンは、気づく。

「殺す気かあ！！！」

思わず、カジンは叫ぶ。

自分達を捕まえに来た男とはいえ、安易に殺害するなど、カジンには信じられない。

マサイは、命をどうとも思つちゃいない。

そういう男だということに、気づいたせいか、廃墟の壁から急いで立ち上がる。

立ち上がると、走った。

短距離走のように、突進する。

カジンは、もの凄い勢いでマサイに迫った。

「やめろおおお——————！」

カジンは叫んだ。

その声に、マサイの銃を握る腕がビクついた。
同時に、指に掛かる引き金が動じる。

バン！！

銃声が響く。

「はっ！」

カジンの足が止まった。

銃から硝煙が舞う。

マサイは銃を放った。

「ぐはっ！」

銃弾の命中で、カコイは血を吹く。

そして、翼の羽ばたきが停止し、そのまま地面に墜落する。

地面に轍を残し、カコイは廃墟の床に倒れこむ。

倒れこむカコイを見るカジンは、彼の左肩から血が流れているのに気づいた。

あの銃弾は、カコイの額ではなく左肩に被弾した。

たぶん、さつきのカジンの叫び声で狙いがずれたのだろう。

カコイは、激痛で意識を失つた。

たぶん、左肩の骨のどこかが碎かれてしまったのだ。

鳥人間だったカコイの強靭な肉体が徐々に衰退し、顔も人間の顔に戻つた。

意識と同時に、ウィルスの効力も切れたのだろう。

.....

バゴッ！！

カコイが氣絶している廃墟で、にぶい音が聞こえる。

狼人間から、元の人間の顔と肉体に戻ったマサイがカジンを殴りつけた。

狙いを外れさせたのと、ずっと、足手まといで居たからだ。
唇が切れたカジンは、口から血を流しながら…。

「あんたに、人を殺す権利はないでしょ！！」

そう叫ぶカジンの受刑服の襟足を、マサイは乱暴に握る。

「甘つたれんなよ、ガキ！…どっちにしろ、もう亡命してゐる時点で
孤立してんだぜ、俺たちはよ！！！」

そう額に青筋を浮かせて言う。

だが、カジンは退かない。

「罪に罪を重ねて溜まるか！！！」

そう言って、マサイの手を払つた。

「けつ…、じゃあ、ついて来なくていいぜ…、青二才が」

カジンに背を向けて、マサイは言う。

コンビ解消という意思表示だ。

「ついて来ますよ…、どっちにしろ、ロクトミッシュョネズから狙わ
れてますし、あんたには助けてもらつた恩がある…」

そうカジンは言うと、二人は歩き始めた。

こうして、この廃墟から二人は去つた。

カコイは、廃墟に倒れこんだまま。

彼の左肩には、止血のためらしい布が巻かれていた。

これは、カジンがした施しだ。

二人の考えが合わない。

ロクトミッシュョネズは、本気だ。

この国から孤立してゐる。

インテグラルウィルスの効力。

以上のことだが、マサイとカジンに解つた。

その上で、二人はまた歩き始め廃墟から離れる。

このまま、歩けば違う街に着く。

.....

第六話「一つの修羅場」

廃墟の数々を抜け、カジン、マサイはイナリ街という街に着いた。
この国で言う下町に当たる場所だ。
派手ではないが多くの商店が並び、どこか、ほつとしてしまう街並みを見せている。

この場所に、一悶着ありながらも、カジン、マサイは来た。
とりあえず、二人は指名手配されているかが不安ではあるが、食事を取らなければならない。

のどかな街並みを見せるイナリ街にも、当然、ロクトミニッシュョネズ配下の警察署が存在する。

カジン、マサイは、この場所を避けるている。

イナリ街の警察署には、すでに一人の顔写真が送られていた。

当然、この写真から指名手配写真を作ることは可能。
すぐにも、作れる。

だが、警察署は指名手配を作成しない。

何故なら、本部であるロクトミニッシュョネズが作らせなかつた。

指名手配写真は、被疑者の顔写真や氏名などを配布して、一般人の協力を呼びかける、公開捜査という捜査上の手法であり、被疑者を追いかける事が出来る。

だが、それを行わるのは、自信があるからだ。

だから、一般人の協力は必要ない。

だから、この警察署には、この一人が来てかも知れないという程度にしか取り扱わない。

その代わり、この街には、すでに、ロクトミニッシュョネズの例のインテグラルウィルス投与者が動いている。
対処が早いのだ、ロクトミニッシュョネズは。

古びた街の商店街は、多くの人が行き来している。

一つ、一つの商店街に人盛りが出来ている。

そんな街並みを、カジン、マサイは歩いていた。

数時間前に、気の合わないことに気づいた二人は気まずい。

マサイは横目で、カジンを睨む。

それを、カジンは無視。

相手にしていられない……。

これが、本音だ。

あと、カジンの服装はさつきまで、ガズ市街少年院の囚人服だった。だが、さすがに怪しまれる。

それで、さつき寄つた古着屋で買つて来た着物と袴を、カジンは着ている。

剣道の選手みたいな服装だ。

これしか、安い服がなかつた。

妙に浮いた服装だが、今は我慢するしかない。

そんなカジンを横目で睨むマサイが、口を開いた。

「おい、ガキ……」

と、喧嘩腰に言う。

それに対し、カジンの眉毛が動く。

「おりや、用事あるから、適当に街うろついてひ……」

マサイが、二手に別れるように言った。

たぶん、この妙な息苦しさから逃れるためである。

「用事つたって、どーセ、歩いてる際に、見つけたフーザーに行く
だけでしょ……」

そうカジンは、言い返す。

「なんで、わかつたんだよ山猿…」

「凶星かよ…」

マサイは、そのまま、カジンから離れるように歩き始めた。カジンも、マサイが離れたのに、なにも言わずに無言で見送る。離れていくマサイの足取りは、言ったとおりに、まだ昼間だと書つたのに怪しい店が立ち並ぶ場所に向かう。

陽が暮れはじめ、街並の看板の電灯が灯り始めた。景気良く寄寄せ、始め、仕事歸りの中年男性らが、スナノスと渡つ

を晴らすために、酒屋、風俗店に入つて行く。

そんな密にて町が並ぶ道を、マナイ亞姫へ歩く。

! !

カジンの文句を、大声で言う。

イライラを晴らすため、飲み屋にしろ、風俗店を入念にマサイは厳選している。

「イナリ街の風俗店は、結構、評判いいからな…」
欲望に忠実なマサイは、店選びに胸をときめかせる。

一方、カジンはこの街の公園のベンチで、一息の休息を得ている。陽が暮れた公園には、男女が手をつないで、仲良くダベっている。所謂、アベックが多く、公園に居る。

「なんなんだ、Jの公園…」

見渡すかぎりに、アベックが埋め尽くす公園に、今まで女性と手を触れたことすらないカジンは息苦しさを感じる。

この息苦しさは、マサイと一緒に居る時以上の苦しさだ。

「マサイの野郎…」

訳もなく、マサイへのムカつきが増した。

しかし、カジンはあくまで一人だ。

マサイが、風俗店を厳選している時。

ふと店と店の間に、隙間がある。

その隙間に、マサイが目が行く。

すると、そこから人の影のような物が見えた。

「！？」

マサイの感心が、風俗店よりも、隙間の人影に行く。

「カツアゲされて、落ち込んでるガキか？」

そう思い、その隙間の方へと足を進ませた。

すると、そこには…。

「…！」

マサイは、目を疑う。

暗い隙間には、似合わない可憐な着物を着た少女が店の壁に背を付けて座り込んでいる。

その少女は、透き通るような金色の髪の毛に、凜とした表情に、変わった紫の瞳であった。

この少女の容姿に思わず、マサイは目を奪われる。

少女は、マサイの存在に気付いたのか、下を向いていた首の向きを変える。

彼女の瞳の色に、マサイは、吸い寄せられるような感覚を得た。

.....

公園で、うなだれているカジン。
その様子を、数十メートル先の木々に交じるように見ている人影があつた。

人影の手には、無線機らしい機器がある。

こうして、カジンは第二波の修羅場を迎える事となる。

.....

第七話「暗示」

カジンは、公園のベンチに背をかけている。その間に、彼は異様な緊迫感を感じている。誰かから、睨まれているような感覺だ。

（なんだ…）

身の毛のよだつ感覺に、彼は恐怖した。

とりあえず、ベンチから立ち上がり背伸びをし、立ち去ることにした。

とりあえず、勝手に行動しはじめたマサイを探すことだ。

一方、マサイは不思議な少女と町のビルの隙間で出会った。その少女は、見据えた田でマサイを見つめる。

（なんで、こんな娘が、こんな場所に…）

そう、マサイは思う。

すると、その少女が口を開いた。

「あなたは、たぶん、逃げ切れない」

その言葉に、マサイは驚く。

逢つたばかりの娘に、現在の自分のことを示すような言い方をされたのだ。

「どういう意味だ！」

思わず、反論した。

だが、彼女はなにも言わない。

すると、彼女は立ち上がり、その場から去った。

マサイは、ただ呆然と立ちすくんだ。

まるで、これから自分の末路を言われたようで。

だが、それでも彼らは逃げなければならない。

何故なら、もう人とは違う力と運命を持つてしまったのだから。

カジンは、歩いた。

思えば、自分が少年院から脱獄してから、まだ一日も経っていない。なのに、今では塀の外の空気を吸っている。

昨日まで、考えられなかつた状況だ。

もう一生濡れ衣のまま、閉じ込められていたと思うと、不本意だが、マサイという男に感謝しなければならない。

そして、これからはどうなるのか…。

そのことも、いつも考えていた。

しかし、こうなつてしまつた以上は逃げ切るしかないと、自分に誓うことに、彼は決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1810b/>

キジンガ

2010年12月10日00時32分発行